

SDGs の達成に向けた共創的研究開発プログラム（シナリオ創出フェーズ）

令和 3 年度採択プロジェクト 事後評価報告書

2024 年（令和 6）年 3 月

研究開発プロジェクト名：科学と実践が駆動する「地域ガバナンス」に基づく、未来志向型の森林生態系の適応的管理に関するシナリオ開発

研究代表者：森 章（東京大学 先端科学技術研究センター 教授）

協働実施者：中西 将尚（知床財団保護管理部 参事）

実施期間：2021 年（令和 3 年）年 10 月～2023 年（令和 5）年 9 月

総合評価

十分な成果が得られたと評価する。

本プロジェクトは、「しれとこ 100 平方メートル運動の森・トラスト」の森林生態系を対象に、科学に根差した自然再生事業の持続可能な運営検討を行うこと、および世界に先んじて知床で実施している森林生態系の再生の取り組みをさらに長期的に持続可能な事業へと昇華させるとともに、多地域展開可能な自然再生シナリオの策定を目指すものである。

学術的な評価に基づく高い研究レベルと中長期的・さらにその先の未来を見据えた地道な課題解決と人材育成の取り組み、ステークホルダーとの対話や発信への取り組みは高く評価できる。今後は解決策の定着と多地域への展開向け、知床での進化、多地域展開すべきモデルの開発（パッケージ化およびユニット化）が具体的に進展することを期待する。

項目評価

1. 目標の妥当性

目標は十分に妥当であったと評価する。

知床での森林生態系の再生の取り組みを持続可能なもの・多地域展開可能なものにするという全体目標は SDGs の実現に貢献するものであり、ニーズと重要性の高さから期待が大きい。その実現に至るために、モニタリングデータの統合と森林再生施業の評価、森林景観モデル（iLand）による将来予測、解決策の定着と多地域展開の 3 項目を配置したことは妥当であったと評価する。一方で、多地域展開を可能にするモデル開発に関する定量的な目標が設定されておらず、今後十分な議論が行われることを期待する。

2. 研究開発プロジェクトの目標の達成状況および研究開発成果

プロジェクトの目標は達成されたと評価する。

豊富な科学的エビデンスが得られ、自然再生を支援する様々な団体・個人との連携など十分にシナリオ創出がされている。また、学術論文が多く公表されたことも評価する。モニタリングデータの統合と森林再生施業の評価は、ドローンレーザー測定の実施による高解像

度の林冠構造の取得や森林内部の構造的多様性算出を実現した。iLand による将来予測は、林野庁による広域調査データなどを統合してササ掻き起こし後の裸地 1ha の 100 年間の回復過程シミュレーションを行うとともに、費用負担意思額を反映した。一方で、解決策の定着と多地域展開は、小笠原などとの意見交換は実施されたものの、パッケージ化やユニット化が確立されていないため、今後の展開に期待する。

3. 研究開発プロジェクトの運営・活動状況

プロジェクトの運営・活動状況は十分に妥当だったと評価する。

モニタリングデータの統合と森林再生施業の評価、iLand による将来予測、解決策の定着と多地域展開という 3 つの研究項目について、それぞれに関係する専門家や機関等との適切な連携によって効果的・効率的な運営が行われたことを評価する。協働実施者が、教育機関からの実習、行政との連携、市民団体等からの視察の受け入れなど、積極的に実装に向けての活動を行った点も評価する。今後は、知床における取り組みの進化や、多地域展開に向けたパッケージ化やユニット化の確率を期待する。

4. プロジェクト終了後の事業構想(研究開発成果の活用・展開の可能性)

プロジェクト終了後の事業構想は、概ね描けていると評価する。

知床で構築した持続可能な森林再生システムの多地域展開に向けて、連携の強化のために多様なステークホルダーと議論が実施され、多地域展開が可能なシステム作りに向けた展開が描かれたことを評価する。「アライアンス」の形成に着手したことも今後の多地域展開につながる活動として評価する。今後は、多地域展開が具体的に進展するために企業との連携拡充に加え、他の世界自然遺産地域での着手、科学実証と現場実践の並行的推進や、官民それぞれにおける担い手の育成などを含めた展開の具体的な計画策定を期待する。

5. その他

なし